第1部

# 策定にあたって



自治·行政

# 1. 計画策定の趣旨

急速な少子高齢化の進行や人口減少社 会の到来、環境問題の深刻化、経済のグ ローバル化、地球規模での情報化の進展な ど、私たちを取り巻く社会情勢は大きく変 化しています。また、住民ニーズの多様化・ 高度化や地方分権の更なる進展などにより 地域間競争が激化する中、地方自治体は新 たな時代の岐路に立たされています。

こうした状況にあって、本市はこれまで、 「『坂の上の雲』をめざして」をまちづくりの 基本理念として掲げ、明治という時代に夢 や目標に向かって明るくひたむきに生きた 先人たちの精神を新たなまちづくりの貴重 なメッセージとして受け止め、松山ならで はの地域固有の資源を活用した個性あるま ちづくりを進めてきました。

今後とも、この理念をしっかりと継承して いくとともに、一人でも多くの人が笑顔で自 分たちの住むまちに愛着や誇りをもち、ま た、魅力にあふれ、市外の人からも「行って みたい」「住みたい」と思われるまちを市民の 皆さんと一緒につくりあげていきます。

# 2. 計画の期間と構成

**1計画の期間** 平成25(2013)年度から平成34(2022)年度の10年とします。

### 2計画の構成総合計画は、基本構想、基本計画及び実施計画で構成します。 基本構想 将来都市像とまちづくりの理念を明らかにする もので、期間を10年とします。 基本構想 基本計画 基本構想を実現するための施策の内容を体系的 に示すもので、期間を5年とし、必要に応じて見 直します。 基本計画。 実施計画 基本計画で定めた施策を推進するための事業を 示すもので、期間を3年とし、必要に応じて見直 実施計画● します。

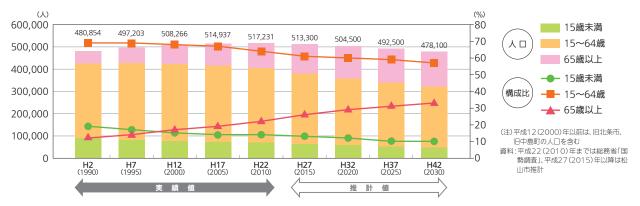
# 3. 人口などの見通し

詳細な数値は資料編に掲載しています。

#### ●人口の見通し

これまで微増から横ばい傾向であった松山市の総人口は、今後徐々に減少し、総合計画の最終年である平成34(2022)年には約50.0万人、平成42(2030)年には47.8万人程度になると見込まれています。

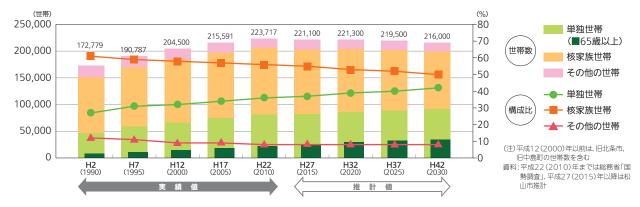
年齢3区分別に見ると、65歳以上の高齢者の割合が年々高まる一方、15歳未満の人口の割合が低下すると見込まれており、平成42(2030)年には、それぞれ、33%、10%程度となることが予想されています。



### ②世帯数の見通し

これまで増加してきた松山市の世帯数は、今後横ばいから減少傾向に転じ、平成34(2022)年には約22.1万世帯、平成42(2030)年には21.6万世帯程度になると見込まれています。

世帯類型別では、単独世帯の割合が年々高まる一方、 核家族世帯の割合が低下することが見込まれており、 今後は、特に高齢者の単独世帯の割合が高くなること が予想されています。



#### **3**就業者数の見通し

近年、減少傾向にあった松山市の就業者数は、今後 も減少が続き、平成34(2022)年には22.9万人程度 になると見込まれています。 産業別では、上昇傾向にあった第三次産業の割合がさらに高まる一方、第一次産業の割合は横ばいで推移し、第二次産業の割合は低下していくことが予想されています。



# 4. 松山市の地域特性

#### ●松山市の地勢と都市のなりたち

瀬戸内の温暖で穏やかな気候に恵まれた松山市は、広島県、山口県の県境に接する忽那諸島から高縄山系のすそ野を経て、重信川と石手川によって愛媛県のほぼ中央に形成された松山平野へと広がっています。

松山には、約3万年前から人が住み始め、さらに稲作が伝わったことで定住化が進み、集落が形成されました。平安時代から室町時代にかけて活躍した河野氏は、12世紀後半には風草郡高縄山に城を築き、14世紀に湯築城(現在の道後)に移ったため、この頃から道後が政治や経済、文化の中心として栄えました。

慶長7(1602)年から、加藤嘉朝が松山平野の中心にある勝山に松山城を築くとともに、新たな城下町を整備したことから、政治・経済の中心が道後から松山城下へ移りました。その後、松山藩主が蒲生忠知から、徳川幕府の親藩大名である松平定行となってからは、儒学や国学、能楽、俳諧、茶道などが盛んになるとともに、城下町として更なる発展を遂げました。

### ②人づくりを重んじる風土の醸成、国際交流の促進と新たな文化の創造

明治維新における「学制」公布を受けて、松山にも小学校が設立され、教育が一般に普及することとなりました。この頃から特に学問や教育を重視し、人づくりを重んじる風土が醸成され、正岡子規や高浜虚子といった文学者や、秋山好古・真之兄弟など、多彩な人材を輩出するとともに、夏目漱石のような優れた人材を教師として招いていました。現在でも、市内に多くの大学や多様な技術を学べる専門学校のほか、県立や私立の中高一貫教育校が複数立地するなど、充実した教育環境が整っています。

また、時代の流れに応じて新しい文化を取り入れる一方で、約1,200年の歴史をもつ「お遍路」文化や、俳句に代表される「ことば」文化など、先人たちが遺してくれた文化を継承しており、現在でもお遍路さんへのお接待や、「俳句甲子園」「俳句ポスト」などの取り組みが行われています。

さらに、サクラメント市(アメリカ)やフライブルク市(ドイツ)、平澤市(韓国)と姉妹・友好都市提携を結ぶなど、国際交流をとおした新たな文化や価値観の創造にも取り組んでいます。



### ❸四国における交通や産業の中心としての発展

飛鳥時代には、聖徳太子をはじめ大和朝廷の要人が多く訪れたともいわれ、久米管衙(当時の官庁)が設置されるなど、松山は古くから中央との結びつきが強い土地で、中央と百済・新羅など海外とを結ぶ海路の要衝でもありました。

古くから海の玄関口であった三津浜港に加え、明治後期には日本初の狭軌の軽便鉄道が高浜まで開通したことを受け、大型汽船が停泊できる高浜港が開港され、関西・中国・九州地方などとの航路の充実が図られました。

昭和に入ってからは、国鉄松山駅(現在のJR松山駅)の開業や松山空港における民間旅客輸送の開始、 松山自動車道の開通、松山環状線の全線開通など、陸 や空の交通基盤が整備されてきました。そして現在では、松山外環状道路の整備が進められており、交通の 利便性がますます高まりつつあります。

また、松山市には、日本書紀にも登場する日本最古の温泉である道後温泉や美しい姿を誇る松山城などの歴史的資源、新鮮な海の幸を使った伝統料理や日本三大絣の一つである伊予絣などの伝統的資源のほか、瀬戸内の風光明媚な景色など、多くの地域資源があります。そして、これらの豊かな資源を活用した観光関連の産業をはじめとするサービス業が盛んであり、さらに機械や繊維、化学などの製造業が集積するなど、愛媛県の県都、四国の中心都市として発展を続けています。

#### ◎市制の施行、合併による市域の拡大と地域資源の多様化

廃藩置県後の再編によって、明治6(1873)年に愛媛県が誕生し、松山に県庁が置かれることになりました。そして、「市制・町村制」公布の翌年、明治22(1889)年に全国で39番目の市として「松山市」が誕生しました。

昭和55(1980)年には、四国で初めての40万都市に、平成12(2000)年には中核市となり、さらに平成17(2005)年には、旧北条市と旧中島町を編入合併し、四国初の50万都市となりました。

そして現在、鹿島や高縄山などの豊かな自然に恵まれ、善応寺や櫂練りなど、中世の歴史や文化が残る北条地域、また、多島美を誇り、かつては忽那水軍が活躍した悠久の歴史や奴振りなど、島独自の文化を育む中島地域が加わったことで、松山市の地域資源の多様性はますます広がっています。

